



「湯田川・藤沢・田川ゆったりきづきの里協議会」の若手たち。メンバーがそろったことでミュージアム開催にこぎつけた。仕事の合間に米の炊き方のワークショップを4回開くなど研究にも余念がない。参加者には常に新しい気づきを持ち帰ってもらえるように頑張りたいと意気込んでいる。



開催日だけはバスの待合室が知の宝庫になる。この日は庄内米の歴史や栽培、食べ方、薬剤不要の除草法まで展示物がずらり。さらにマナビトが研究しつくした、ベストな米の浸水時間、米と水の黄金比など美味しい庄内米の炊き方も伝授。彼らの丁寧な解説が加わり、より理解が深まる。

鳥海山と出羽三山、そして日本海に囲まれた豊かな自然、在来作物の継承、亀ノ尾を初めとする品種開発など人々のたゆまぬ英知と努力、その2つが織りなした庄内は豊かな食の里を築いてきました。新シリーズでは、庄内の食と農の価値を掘り下げ、その魅力をさらに向上させようとする、地域の新しい取り組みを紹介します。

第1回目は、農産物をテーマに若者が中心となって取り組んでいる、鶴岡市湯田川地区の「庄内朝ミュージアム」を取り上げます。

## バスのりばが「湯田川博物館」を巡る旅のスタート地点に

まだ薄暗い11月の日曜日の早朝。湯田川温泉街の奥まった一角で、若者たちが黙々と準備を進めている。時計が7時を回る頃、浴衣に上着を羽織った宿泊客が、次々と「朝」のロゴが入った暖簾をくぐり、「バスのりば」の待合室へ入っていく。やがて温泉街の入り口から、子連れの家族や友人同士で訪れる人たちが続々と姿を見せ始めた。

庄内屈指の名湯を誇る静かな温泉街では、月に1度、地域の人々の手によるユニークな活動が行われている。

食、文化、農や観光に生きる

## 町を丸ごと博物館にするというエコミュージアムの要素を取り入れた新たな取り組み。それが「庄内朝ミュージアム」。

こらしている。展示、説明、食事、さらには湯田川の町を巡るガイドウォークで湯田川を丸ごと知ってもらおう。「湯田川に來れば庄内が分かる」。そんな強い思いが伝わってくる。今回3回目のテーマは「米」。展示場であるバスのりばでは、庄内米のルートである亀ノ尾についての紹介文や、米に関する資料の展示、無農薬米を作るためのカモも登場するのだが、それはあくまでも最低限の情報にすぎない。なにより訪れた人々をとらえてしまうのが、メンバー扮する「マナビト」による解説。

その熱意のこもった語り口に思わず引きこまれる。「直接話を聞け交流できるのがなにより嬉しい」「庄内にあふれる農をもっと知りたくなった」と参加者は笑顔をみせた。

バスのりばを出てからは自由行動だ。「朝カフェ」では庄内米の食べ比べができる。「ご飯が何よりのご馳走」、「湯田川温泉の湯で炊いたつや姫は美味」と、用意したご飯が底をつくほどの盛況ぶり。皆、庄内米の美

人、土地の匂いなど、地域の有形、無形の資源のすべてを取り込み、町を丸ごと博物館にするというエコミュージアムの要素を取り入れた新たな取り組み。それが「庄内朝ミュージアム」だ。開催日の日曜日だけは、バスのりばが「湯田川博物館」を巡る旅のスタート地点になる。

## 農産物をテーマに、マナビトの熱意のこもった解説

庄内朝ミュージアムには3つの大きな柱がある。「知る」、「食」する、「体」感する、だ。毎回1つの農に関わるテーマを取り上げ、地元民にも訪れた人にも深く学んでもらえるよう工夫を

味しさを再発見したようだ。また、この日のガイドウォークの参加者は25人。理太夫旅館の若女将、太田百合さんの歯切れよい解説でホテルの里、由豆佐売神社等を巡ると、紅葉の映えた町をいっそう身近に感じた。

## 湯田川への想いが仲間を得ることで一気に花開いた

それにしても、なぜ湯田川で「庄内朝ミュージアム」を行うことになったのだろう。「ここ数年のうちに若者の数が増えた。でも、みんな1人でも何ができるか迷っていた」

2年半前に帰郷した事務局の中心、つかさや旅館の若旦那である庄司丈彦さんはそう話す。来年は湯田川温泉開湯1300年の記念の年。「何かしなければ」。いっそう気持ちがくすぶっていた。そんな時、湯田川の資源に魅力を感じていた庄内農文化交流推進協議会を中心に「湯田川を語る会」が開催された。そこには同じ志を持つ若者が大勢参加していた。湯田川への想いが、仲間を得ることで一気に花

朝カフェ&山王マルシェ



湯田川に惚れこんだ小野寺紀允さん(左)と、元々映像やデザインに関わってきた村上直人さん(右)。「うまいものを食べたい」というだけで手間のかかる作業をいとわない庄内の生産者に、寡黙で真面目な庄内人気質を感じている2人。



回を重ねる度にテーマのゴム印が増えていくTシャツ。「朝」マークはバス停と鍵をイメージ。

「最初そのまま、次に塩をかけて食べて」。メンバーの言葉通りにご飯をいただき、旨みが増しておかずのいらぬ美味しさに。参加者も「朝からこんなに美味しいものを食べられて贅沢な気分になります」とにっこり。同会場では「山王マルシェ」が庄内の農産物を直売していた。この日は平田赤ねぎが大人気。

次回朝ミュージアムのご案内／平成24年2月5日(日) 8:00~12:00  
テーマ：日本酒 圓つかさや旅館 庄司丈彦 ☎0235-35-2301

ガイドウォーク



本来ガイドウォークと朝ミュージアムは別々に行っていたが、ミュージアム参加者からもっと町を知りたいという要望を受けドッキングさせた。「ミュージアム開催後の方が積極的にお客様と会話を持つようになり仕事も楽しくなった」と話すガイドウォーク担当の太田百合さん。



事務局の中心、庄司丈彦さん。「他地区の生産者や製造業者などもダイレクトに交流できるようにになれば」と語る。朝ミュージアムをきっかけに、多くの子どもが来て、覚えていけることが湯田川の将来につながるかと考えている。



「湯田川が育んできた歴史を土台にしなければ外から受け入れてもらえないことを、若者はきちんと心得ている」と安心する協議会会長の萬年慶一さん。昔の湯田川は業種別に閉塞的だったが、今は垣根を越えてつながり始めている。



「若い人が7~8人に増えたことで一つのまとまった企画が可能になった」という大滝研一郎さん。ミュージアムで取り上げたテーマに関わる人々と協力しあうことで、さらに新たな取り組みを生むような間接的効果を期待している。

若者は自分たちの足元に広がる古より続く「食と農」を見つめ直し、そこに現代の光を差しこんだ。

開き、それが「庄内朝ミュージアム」の誕生へとつながる。ミュージアムを構成するのは、温泉組合や観光関係者だけではなく、「湯田川・藤沢・田川ゆつたりきづきの里協議会」というまったくの有志。さらに特徴的なのは、異業種経験者が多いことだ。元バンドマン、映像関係、旅館再生業務者。ここに近隣地域農家も加わることで多方向から考察、表現が可能になった。「生産者が苦手な、デザインや魅せ方の表現を学べることは大きな収穫です」。そう話すのは、湯田川に魅せられ「外部」から同協議会に名を連ねている、農家の小野寺紀允さんだ。地元で焼き鳥屋を営む村上直人さんと2人で、第1回目のテーマ「だちや豆」から山形大学農学部

や生きがいを知ることで触発された。「庄内に生まれて本当によかったと思えた感動をもっと周囲に伝えたい」。

**今度は私たちが、子ども、孫のために続けていかなければ**

町は若者の意気込みだけでは成り立たない。土地の歴史を熟知した年配者の理解とバックアップが必要だ。同協議会会長の萬年慶一さんはこう話す。「彼らが活動しやすいように地ならししようという気持ちが一番大きい。昔の人と違い、若者は人を乗せるのが上手。でもそうやって町にぎわいが出てきていることが嬉しい」。

そして、何よりの最大の協力者は自分たちの家族だ。家業との両立が困難な中で、年配者が理解し快く送り出してくれるのがありがたいと太田さんは言う。「梅まつりなどの行事も、先代

の人たちが頑張ってくれたからこそ現在に連なる。今度は私たちが、子ども、孫のために続けていかなければと思うのです」。

**体験することで人と人をつなげていくことが一番の目的**

3回を数えた庄内朝ミュージアムだが、まだまだ課題も多い。「展示場での「知る」、朝カフェの「食」。それに加え、農を「体験」する企画を考えなくてはいいけません」。体験することで人と人をつなげていくことが一番の目的、と庄司さんは考える。

地元の人に朝ミュージアムを今以上に知ってもらおう広報力だ。そして彼らのこの先の目標として、今はまだ湯田川を拠点とした活動が中心だが、今後は田川・藤沢地区ともさらに深い関係を築き、庄内の各地域とも広くつながることを掲げている。

歴史豊かな湯田川では、今、農産物をテーマに地域を巻き込んだこれまでにない取り組みが始まっている。若者は自分たちの足元に広がる、古より続く「食と農」の価値を見つめ直し、そこに現代の光を差しこむことで

また九兵衛旅館の若旦那、大滝研一郎さんは、すぐに宿泊につながることを目的ではないと語る。「まずミュージアムに参加してもらおうことが大事。直接お金は生まないがネットワークを形成できる。また開催にあたり日々学んでいる良質な話をお客様に提供できることが自信にもなっている」と、間接的な効果に目を向ける。村上さんは「若い世代だけでなく、もっと湯田川のお年寄りにも遊びに来てほしい」と話す。目下の課題は、

新たなにぎわいを創出した。「湯田川はいつも何かやっている、と思ってもらいたい」。そんな温泉よりも熱い心意気に誘われて、月に1度、気軽に庄内の農文化について学びながら、食べて飲んで温泉に浸かる。日曜の朝をゆったりと過ごす、素敵な時間の使い方だ。

庄内に生まれて本当によかったと思えた感動をもっと周囲に伝えたい。

取材・文：鞍貫明子  
撮影：Cradle編集部  
企画・協賛：庄内広域行政組合